

海辺の文学記念館

海辺の文学記念館では、蒲郡が 20 世紀初頭に著名な作家たちの保養地として人気を集めるようになった経緯が展示されている。1912 年に現在記念館がある海辺に開業した旅館「常磐館」と、その創業者で蒲郡を観光地として発展させるのに重要な役割を果たした名古屋の実業家、滝信四郎（1868-1938）を中心に物語が展開する。館内には常磐館と蒲郡ホテル（現・蒲郡クラシックホテル）にまつわる遺品や資料、常磐館の客室の再現、ノーベル賞作家の川端康成（1899-1972）、谷崎潤一郎（1886-1965）、志賀直哉（1883-1971）など、常磐館に滞在した作家たちの生涯や作品を紹介するパネルなどが展示されている。

レジャーと文学

蒲郡と日本を代表する文人たちとの交流は、滝信四郎の努力によってもたらされた。裕福な織物商であった彼は、実家の別荘地であり、幼い頃から愛していた三河湾に浮かぶ竹島の対岸に旅館「常磐館」を構えた。

当時、蒲郡はすでに旅行先としてよく知られていたが、滝はこの地を全国に宣伝したいと考え

た。そこで彼は、著名な作家を常磐館に招待し、彼らが蒲郡や竹島、そして常磐館のことを作品に書くことを条件に、常磐館に宿泊してもらうことを思いついた。この作戦は成功し、常磐館のオープンから、川端、谷崎、志賀、菊池寛（1888-1948）、山本有三（1887-1974）、井上靖（1907-1991）などの作家が旅館を訪れ、数多くの小説、短編小説、詩などで竹島を取り上げた。

川端の短編『驢馬に乗る妻』は、常磐館に隣接して客をもてなすために作られた乗馬場を中心とした作品である。一方、谷崎の『ささめ雪』では、中心的な登場人物の姉妹の一人が蒲郡を訪れ、花婿候補との満足のいかない出会いの後、常磐館に滞在する場面が描かれている。

記念館

常磐館は 1982 年に解体されたが、その名残と雰囲気は、1997 年に旅館の跡地にオープンした海辺の文学記念館に受け継がれている。この記念館は、1910 年に蒲郡の中心部に建てられた、もともとは診療所として使われていた木造平屋建ての建物を竹島海岸に模倣・復元された建造物に入っている。

館内には常磐館に滞在した作家たちのエピソードや、常磐館やその周辺を題材にした作品を紹介する解説パネルが展示されている。1927年8月に谷崎潤一郎が宿泊した当時の様子を再現した常磐館の部屋もある。畳の部屋には障子があり、障子を開けると対岸の竹島が見える。

また、蒲郡ホテルとその別館にまつわる品々も展示されている。その中には、ホテルの入り口近くにある六角堂の外観をかつて飾った豪華な木彫りなどもある。また、蒲郡、竹島、常磐館と蒲郡ホテルの歴史にまつわるテーマを取り上げた特別展も開催されている。

記念館の「時手紙」は、蒲郡で過ごした思い出やメッセージを書くと、来館から2ヶ月～10年後の好きな日に、希望の住所（日本国内）に郵送してもらえるというもの。